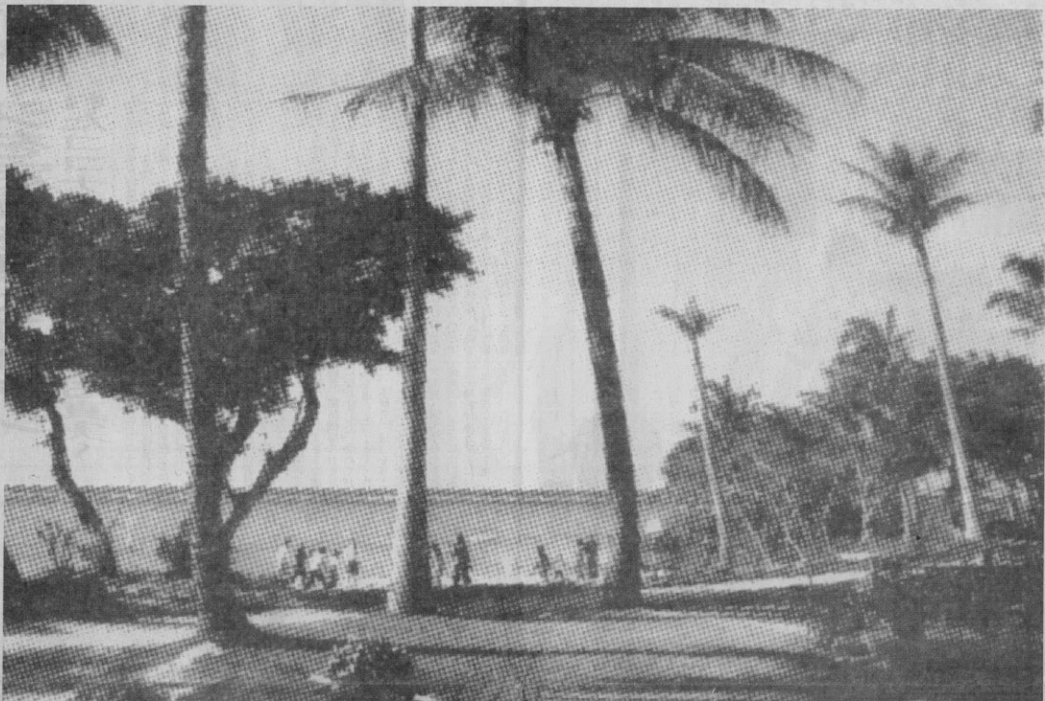


知られざる秘話「1万個のココナツ」



沖繩の南国イメージを定着させたココヤシ ハワイから贈られたココナツ1万個の知られざる真実

昨年九月十八日、天理教ハワイ伝道庁において天理大学の佐藤孝昭教授は、1972年5月15日の沖繩の本土復帰の時期、ココナツ1万個がハワイから沖繩に贈られた知られざる秘話の調査結果を、沖繩の南国イメージを定着させたココヤシ・ハワイから贈られたココナツ1万個の知られざる真実」と題して報告した。ハワイに住んで40年近くになるが、これまで戦後豚を贈ったという話は聞いたことがあつたが、この話は聞いたことがない。そこで、調査を担当した天理大学地域文化研究センターの佐藤孝昭、住原則也高教授の報告書を基に、その経緯などを紹介したい。両教授は、本題に入る前に次のように書いている。

沖繩・宮古島・八重山地方が本土復帰したのは戦後72年を経た1972(昭和47)年5月15日のことである。この日、琉球政府から沖繩県へ移行し、さまざまな面で「本土化」が推し進められた。しかし、本土が着々と戦後復興し、しかも高度経済成長を続けていく中で、激戦地となった沖繩本島は、運々として復興は進まなかつた。戦時中、米軍が落としたり爆弾は1平方メートルあたり2トンに及んだと考えられていることから、沖繩は焦土化した不毛の地から再出発を果たしたといつても過言ではない。自然は破壊されたままの状態が続き、植林や緑化は本土に比べて遅れ気味だったことも領土本島の南半分からはほとんど草半分の姿を消し、樹木らしい樹木は目立たないほど荒涼としていた。もともと沖繩は、亜熱帯植物が生育する緑豊かな島だった。それが、先の戦争による惨禍で豊かだった生態系は大規模に破壊され、場所によっては緑が完全に消滅したところさえあつた。今日では想像もできない景観であつた。

いる。そのようなイメージづくりには貢献したのには、ほかならぬ椰子の木である。とりわけ、数個の大きなココナツを上層部の葉の付け根につけたココヤシ(Coconut)という木で、ヤシ科植物の一種である。このイメージはちょうど米国におけるハワイと同じようなもので、ココヤシが南国の情緒を醸し出している点で共通している。いうよりも、沖繩のイメージづくりはもともとハワイを一つのモデルとしていたのである。

ココヤシは琉球列島には自生しておらず、個人がココヤシの実(こなた)を南方で入手し、芽移し・育樹することにはあつたが、計画的にそかも広範囲に植え付けられることは復帰前までの沖繩ではなかつたのである。ただ一部のホテルで例外的に実施されたことがあつた。

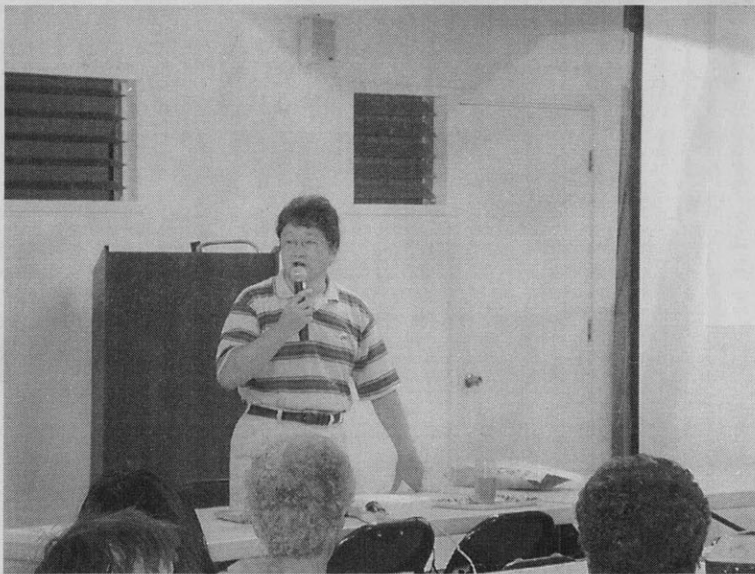
ところが復帰を前に、沖繩に住む一人の天理教信者が「沖繩日本のハワイにしたい」という志を抱き、そのことをハワイの天理教信者に伝えてココナツ採取の協力を呼びかけた。そして、2年後にはこの呼びかけは見事かない、およそ1万個のココナツが沖繩に到着した。これらのココナツは、米軍の輸送船によってハワイのパールハーバーから沖繩の米軍基地

内ホワイトビーチまで運ばれ、当時の琉球政府に引き渡された。その間、ココヤシ移送の障害になつてきた「植物検疫強化規定」は復帰前年に改正され、現実に即した内容として整備された。

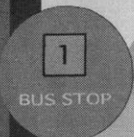
到着した1万個のココナツは、その後、琉球政府(復帰後は沖繩県庁)や沖繩在住の天理教信者によつてそのまま、あるいは発芽させたまとして

沖繩本島や宮古島、石垣島などに運ばれ、そして植え付けられ、生長したイメージづくりに大きく貢献したと考えられている。しかし、残念ながらそのような経緯を知る関係者は少なく、沖繩県民の記憶からもほとんど消えて去ろうとしていく。本研究は、沖繩に導入されたココヤシがどのような経緯でハワイから持ち込まれ、どのように定着していったか、これらを客観的に明らかにすることを主な目的とした。本論では、特にハワイでのココナツ採集や沖繩でのココナツ植え付け作業に係わる経緯とその関係者および関係機関との関

わり、並びにココナツを運ぶために用意された米海軍輸送船の手配などについて、歴史的事実として可能な限り記録にとどめることを最大目標とした。本論執筆にあたっては、総論と沖繩関係者は佐藤が、ハワイ関係は住原が担当した。なお、本研究に関する調査では、さまざまな関係者、関係機関にお世話になりました。改めてお礼を申し上げます。特に、本研究の機会を与えていただいた井上昭夫天理大地域文化研究センター長(同大学おやさと研究所長)並びに山口國三天理教沖繩教区長に対して、深甚なる謝意を表します。



昨年9月18日、天理教ハワイ伝道庁で調査結果を報告する佐藤教授



BUS STOP

ここにも、「Made in 日本製紙」。

